

看護系短期大学生の 職業レディネスと関連要因の関係 —交差遅延効果モデルによる 検討—

三浦 恭代*

Factors Affecting Vocational Readiness in Junior College Nursing Students: A Cross-lagged Effect Model

Yasuyo MIURA*

Educational institutions need to train nursing students with an eye toward vocational readiness to increase the number of graduates who will continue to work in the nursing field. This longitudinal study of junior college nursing students examines the causal relationship between vocational readiness and 3 potentially related factors (School image, degree of understanding of the lessons, and interest in nursing) using the cross-lagged effect model. The only significant relationship observed was between vocational readiness and the student's interest in nursing. As having an interest in nursing increases vocational readiness, fostering an interest in nursing should raise their perceived value of working as a nurse, potentially increasing the number of graduates who remain working as nurses.

key words: nursing students, vocational readiness, cross-lagged effect model, longitudinal study, causal effects

問題と目的

看護師の離職率は一般労働者の離職率 15.0% (厚生労働省, 2017) に比べると低い傾向にあり, 2016 年度の全国平均は, 常勤看護師 10.9%, 新卒看護師では 7.6% となっている (公益社団法人日本看護協会, 2018)。過去 5 年間で大きな増減はないが, 著しい改善が認められていないのも現状である。退職理由の上位は, 結婚・出産・育児など生活上の理由や, 人間関係, 他施設 (分野) への興味のほか, 超過勤務が多い, 休暇がとれない・とりづらいが含まれていた (厚生労働省, 2012)。また, 新卒者に特徴的な理由として, 若者の精神的な未成熟さやひ弱さ, 基礎教育修了時点と臨床との乖離などが指摘されており (厚生労働省医政局看護課, 2010), 教育段階

から臨床現場への円滑な移行が重要な課題となっている。

看護学生は, 看護学校に入学する時点で職業を選択し, 自分の進みたい方向性や目的意識をもっていていると考えられる。しかし, 就学途中で進路変更したり, 挫折したりする学生も少なくない。したがって, 看護教育では講義・演習や実習を通して看護実践を教授するとともに, 社会的役割や専門職業人としての責任や倫理観などの, 職業レディネス (準備性) を高め, 継続して社会に貢献できる看護師を育成していくことが期待される。本研究における職業レディネスとは, 職業人として自律するための心理的準備状態を意味する (若林・後藤・鹿内, 1983)。

看護学生の職業レディネスに関する研究の多くは, 看護系大学生及び専門学校生を対象としており, 看護系短期大学生 (以降, 看護短大生とする) を対象とした研究は見当たらない。したがって, 看護短大生の職業レディネスについて把握していく必要があると感じた。

そこで本研究は, 縦断調査を用いて, 看護短大生の職業レディネスと関連要因との関係について, どちらを起点として因果関係が成り立っているのかを検討することを目的とした。

方 法

調査協力者および調査期間 看護系短期大学に在籍する学生 183 名を対象に, 2013 年 7 月と 2014 年 6 月に実施した。1 回目調査時に 1 年次生と 2 年次生の学生が, 2 回目調査時 2 年次生と 3 年次生に進級している。本研究では, 1 回目と 2 回目の両方に回答している 133 名を分析対象とした。平均年齢は 21.89 歳 ($SD=6.02$) であった。性別は, 男性 21 名 (15.8%), 女性 112 名 (84.2%) であった。

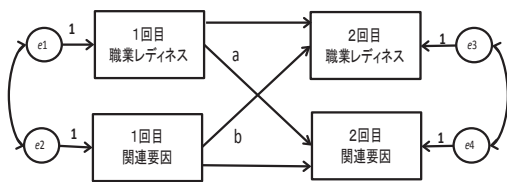
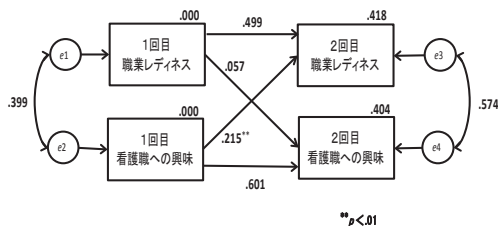
調査内容 職業レディネス尺度 (若林他, 1983) 21 項目を用い, 4 件法で回答を求めた。この尺度は, 「職業選択への関心」「職業範囲の限定性」「選択の現実性」「選択の主体性」「自己知識の客観性」の 5 つの観点から構成され, 限定された職業領域に対して強い選択の関心をもち, それに対する取り組みを現実的, 主体的に進めている状態を測定できる。また, 関連要因として, 入学時から看護学校のイメージはどのくらい変化したか, プラス・マイナスの方向は問わずに変化の程度を質問した。また, 学校の授業はどのくらい理解できているか, 看護師の仕事にどのくらい興味があるかを質問し, 10 段階で回答してもらった。

倫理的配慮 調査目的, 方法について口頭と書面で説明し同意を得た上で, 調査票を配布した。回答は研究データのみで使用し, プライバシーに配慮して慎重に取り扱うことや, 学校の成績とは一切無関係であることを丁寧に説明した。本研究は, 倫理的配慮について調査協力機関へ十分な説明を行い, 承認を得て実施した。

統計処理 分析には IBM SPSS Statistics25.0 および IBM SPSS Amos25.0 を使用した。

* 千里金蘭大学看護学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Senri Kinran University, 5-25-1 Fujishirodai, Suita, Osaka 565-0873, Japan

Figure 1 分析に使用した交差遅延効果モデル (e は誤差)Figure 2 職業レディネスと関連要因の交差遅延効果モデルによる因果係数 (e は誤差)

結 果

因果関係の推定結果 職業レディネスと関連要因の因果関係を検討するために、交差遅延効果モデルを用いた (Figure 1)。1回目職業レディネスから2回目関連要因へのパスaが有意な正の因果係数を示す場合、職業レディネスが高いほど関連要因が高まるという因果関係が推測される。また、パスaが有意な負の因果係数を示す場合、職業レディネスが高いほど関連要因が低下するという因果関係が考えられる。そして、関連要因から職業レディネスへの因果関係についてはパスbの因果係数を検討した。

職業レディネスと関連要因である学校のイメージ、授業の理解度はいずれも有意な関係は認めなかった。しかし、職業レディネスと関連要因の看護職への興味では、有意な関係が示された。最終的なパスa・bの因果係数(標準化係数)をFigure 2に示した。モデルの適合度は、GFI=1.00, AGFI=.98, CFI=1.00, RMSEA=.00, AIC=18.45であり、いずれも十分な値であった。職業レディネスから関連要因(看護職への興味)へのパスaを検討した結果、 $\beta = 0.057$ であり有意な関係は認められなかった。しかし、関連要因(看護職への興味)から職業レディネスへのパスbでは、 $\beta = 0.215$ ($p < 0.01$)であり有意な関係が見られた。よって、看護職への興味が高い学生ほど、職業レディネスが高まることが明らかとなった。

考 察

職業レディネスと「学校のイメージ」「授業の理解度」「看護職への興味」について、交差遅延効果モデルを用いて因果関係を検討した。その結果、看護職への興味が高い学生ほど、職業レディネスが高まることが明らかとなった。同時に、職

業レディネスと学校のイメージ、授業の理解度との関係は示されなかった。

看護系短期大学は、専門学校と同様に修業期間が3年と短く、教養教育と専門教育のバランスがとれた教育課程により、地域社会のニーズに応える専門職業人の養成を行ってきた。今回の結果により、看護短大生の看護職に対する興味・関心を高めることが、専門職業人としての育成につながることを示された。したがって、看護短大生が看護職への興味を高めるために、講義や演習、実習のあらゆる場面において看護職の具体的なイメージができ、看護師の役割や看護の魅力について考える機会となるよう教授していくことが看護教育には必要である。

しかし、今回の結果として示された因果関係は、今回扱ってない他の変数の影響によって生じた可能性も否定はできない。学生は、看護基礎教育を受けることによって、看護師に対する具体的なイメージを取り込みながら、職業アイデンティティを形成していくという見解が示されている(長谷川, 2012)。また、先輩看護師や教員というモデルの存在が、将来の見通しや看護のやりがいにつながっており(交野・高鳥, 2012)、いずれも職業レディネスに関連している。さらに、家族に看護職のいる学生は高い職業レディネスを示している(平間・長江, 2013)。したがって、今後はこれらの要因も踏まえたさらなる検討が必要である。

引用文献

- 長谷川美貴子 2012 看護学生における職業社会化と職業意識の関係性 淑徳短期大学研究紀要, 51, 167-184.
- 平間あゆみ・長江美代子 2013 看護大学4年生の職業レディネスに関する研究 日本赤十字豊田看護大学紀要, 8, 121-133.
- 交野好子・高鳥眞理子 2012 看護学生の学習体験に影響を及ぼす因子に関する研究 福井県立大学論集, 39, 87-98.
- 公益社団法人日本看護協会 2018 2017年病院看護実態調査, (https://www.nurse.or.jp/up_pdf/20180502103904_f.pdf)
- 厚生労働省 2012 平成23年看護職員就業状況等実態調査, (<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000017cjh-att/2r98520000017cnm.pdf>)
- 厚生労働省 2017 平成28年雇用動向調査結果の概要, (<https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/koyou/doukou/17-2/dl/gaikyou.pdf>)
- 厚生労働省医政局看護課 2010 第七次看護職員需給見通しに関する検討会報告書, (<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000000z68f-img/2r9852000000z6df.pdf>)
- 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 1983 職業レディネスと職業選択の構造—保育系、看護系、人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連— 名古屋大学教育学部紀要, 30, 63-98.

(受稿: 2019.6.14; 受理: 2019.8.28)